

## 2. 討 論

○ 二つ質問がございます。一つは、4人のレポーター皆さんにお聞きしたい。跡取りの問題ですけども、学校を卒業して農業に就く人は非常に少ないというお話があったわけですが、この問題については、私、過疎地と言われている不便なところのみならず、大都市周辺でも、それから所得が物すごく高くても、お嫁さんの問題が大問題になっているこの現実の中では、非常に難しい問題だろうと思います。

お聞きしたいのは、新規学卒者だけじゃなくて、例えば定年退職後もう一遍復帰するか、あるいはお嫁さんを都会で見つけてきて、父親のまだ元気なうちにノーハウを習得し跡を継ぐとか、後継者にはいろんな形態があらうかと思しますので、それぞれの現地の実情、またどのようにご苦労なさっているかをもう少し突っ込んでお聞きしたい。これが1点。

それから2点は、中山間地帯における農業の対応が、地域の環境保全という面でどういうかわり合いを持っているのかということです。

例えば新田さんの場合なんか、まさに中山間地帯における高付加価値農業の実現ということでは、農水省の新しい目玉の優等生として突然浮かび上がったんじゃないで、この20年のキャリアの積み重ねを体現しているのだと思うんですが、実はこれが例えばヨーロッパあたりでは、日本と違って、棚をつくらなくてもいいというせいかもしれませんが、ブドウ園なんていうのはやっぱり傾斜地にあるせいでしょうか、非常に外からのインプットが多いということで、むしろインプットを減らしてほしい。そうしたら補助金でこれをカバーしましょうという対応を、ECトータルとしてとっている現状からいいますと、一体どちらを選択すればいいのかというような

悩みが私の頭の中にあるわけです。

和田地区でも比較的傾斜地にブドウ園なんかがありますよね。非常にインプットが多いと思うんです。最近の種なしブドウなど特に多いと思いますが、そこら辺と、いわゆる環境保全というような問題とどう絡ませてこの問題を考えるべきかということを、中山間地域の位置づけとの絡みで、後刻議論していただく時間がいただければと思っております。

後者の問題は時間が許せばということでありまして、まず前段の後継者の問題について承りたいと存じます。

佐藤 うちの方でも後継者問題は大きな問題で、新卒者の就農は去年もおとしもゼロだったはずですよ。どうすればいいのか、今のところわかりません。退職された方が何かという話もあったわけですが、それは今のところうちの方では余り考えていないんです。ただ、1回東京に出てから、帰ってきて農業をやるという形態はあります。

次に嫁不足の問題ですか、ちょっとうちの方も……。

○ どういった工夫をしていらっしゃるかどうか。これはやっぱりマンパワーがないとどうしようもないわけですから。そういう何か、そこら辺の、あるいは今後の取り組み、こうしてみたいという発想でも結構でございます。あるいは、うちは大丈夫なんだ、立派にやっているんだから、ということでも結構です。

佐藤 正直申し上げまして対策はございません。むしろ、他の報告者の方から、どうしたらいいのか、私も教えていただきたいと思っております。

ただ、うちの方では嫁不足の問題は、大きな問題であるということで、うちの方にふれあいの会という、30になっても40になっても嫁さんがいない人がたが集まった会がありま

すが、去年ですか、新宿でトラクターを運転して嫁来いデモというのをやりました。あれに5人ほど参加したんですが、うち2組がまとまったようです。そういう努力は確かに行ってまして、大変な問題なんです。

うちの方は大体1回、子供が外に出るわけですね。学生とか、あるいは就職なんかで1回東京へ出ますと、どうしても後を継がせなきゃということで長男とか長女をまた引っ張ってくるんですね。Uターンさせるんですけども、帰ってきますと長男と長女ですから、お家の事情が許さなくて道ならぬ恋に走ることになり、なかなかくっつかないということがございます。で、東京など都市の方に嫁さんを探しに行くパターンが多いんです。

また逆に、うちは庄内美人に入るんでしょうか、結構美人の女性が多いものですから、一人娘に惚れて東京からお婿さんに来るという方も中にはいます。実は農林水産省の係長だった人がうちの方の一人娘に一目ぼれしまして、職をなげうって今農業をやっていますが、彼は大変まじめに勉強されていて、僕たちがやっている勉強会、学習会で、理論的支柱になって頑張っている。ですから、むしろ生え抜きの人よりは、外から来た人のパワーに期待する面が随分あります。僕らも随分それで啓発される部分がありますし、うちの方のよさとか、あるいは問題点とか、僕らの目に見えないようなものを鋭く指摘もしてくれますので……。対策は、本当言うとなんかというのが正直なところですよ。

星 一番頭が痛くて、しかも決め手のない問題が後継者問題だと思うんですが、よく考えると、これはずうっと長い間にわたる日本の教育の制度とか中身とか、あるいは姿勢とかいうものがそういう若年世代を形成してしまったという、非常に長い、しかも底の深い背景があるものですから、それを一挙に打開するという妙薬はないと思います。

私どもは、幼少の頃からできるだけ土とか

農業とか自然とかに親しんでもらうような機会を多くつくるということ、あるいは都市と農村の交流を通して都会の子供を引き受けるだけじゃなくて、去年からは、墨田区の方ですが、村の子供を2泊3日ぐらいいさせ都市の学習をするという相互交流をやっているんですが、その中で今の子供というのは以外にシビアに見るといえるか、都市のよさと、またマイナス面というのを冷静に把握しますから、そのことを通して、ふるさとのよさみたいなものを再発見するということもあります。

あるいは、もう少し年齢が高くなって学生を受け入れるという場合でしたら、一定の意識とか目的とかに支えられた行動をいたしますので、彼らが成長して社会人になって、できれば農業に1人でも多くかかわる仕事に携わってもらいたいという願望があるんです。今まで消費者との交流をして都市の若者が地域に土着した事例は、私の町だけでも10数人に及ぶんですが、そういう先輩の生き方を見ておって、なるほど、こうすればやれるんだというひそかな自信を持ってそれに続くということもあるわけですね。ですから、村社会がただ単に閉鎖的な今までの枠組みを守ることじゃなくて、それを一たん取っ払ってもっとオープンな形で交流を進めていくことが大変大事だと思っています。

それと、農家の生活パターン、中身が仕事に明け暮れるというような、非常にきついイメージですと、どうしても今の若い人は敬遠しますので、日本農業賞に輝いた飯豊町の後藤隆英さんなんていう人は大変大規模な経営をやっているのですが、かならず日曜日は一家全員で休むことをやっています。足らない労力はアルバイトなんかを確保しながらカバーする。週休2日の時代ですから、特に家畜を飼っておって年中無休というようなところにはなかなか若い人は向いてこないというのが実態としてあるんじゃないかと思うんです。ですから、酪農家の場合でもヘルパー制度と

か、もう少し自由に文化的な楽しみとか、スポーツとか旅行とかというものもできるような工夫が、それぞれの家庭とか地域社会全体の取り組みの中で必要だと思っています。

かつて生活改善が叫ばれた時代に、農休日を決め事として制定したことがあったんですが、これは現実には合わないということで余り実効が上がりなかったんですけども、それは決めたからということじゃなくて、やっぱり自分の生活をどう豊かにしていくのかというあたりで真剣に考えなきゃいけないと思っています。特にお母さん方の意識が変わっていかないと、どうもだめなんじゃないかなと感じています。今は嫁さんに気がねしながら、おしゅうとめの方が肩身の狭い思いをしているなんて言われますけれども、やっぱりそういう世代が旧態依然のところから抜け出せないと同居できないという関係がありますし、一たん同居しても、簡単に別居して町のアパートなんかに住んでしまう。若い人は非常にあっさりと行動しますので、大変難しいところだなと思っています。

ただ、意識的な、あるいは有機農業をやっている青年にはそういう形で都会からチャンスがあるんですけども、特に最近はまだ単にいい食べ物が欲しいということだけじゃなくて、農村の後継者不足なんかを実感している都会のお母さん方が、じゃ、自分の息子とか娘とかを農家にやれるのかと自分の問題として考え始めている。中にはやってもいいと積極的に勧める都会の奥さんも出てきており、まだまだ少数派ですが、そういう芽が出てきたことに私は大変希望を持っています。

しかし、独身大衆というとおかしいんですが、高島町も620数名ぐらい、まだ30代以上の未婚者がおるので、町長は大変頭を痛めて、中国のジャムス市と友好関係を結んで残留孤児の娘さんをぜひお嫁さんにということで、農協の組合長とか農業委員会の会長と連れ立って行ったんですが、そういう正式な外交交

渉では全く手も足も出ないことがわかりまして、もう少し息の長い青年研修とか交流を通して、自然に愛情が芽生えるということに変えなきゃいけないんじゃないかという発想になっているようです。

しかし、農協は韓国から斡旋をしまして、10名近く町内に韓国のお嫁さんが定着していますし、全く個人レベルで中国から1人、2人とお嫁さんが入るということなどがあって、そういう形で農村の草の根の国際化みたいなものは進んでおります。ただ、それがいいのか悪いのか、私にはかなり複雑な心境があるんですけども、特効薬的なものがないので、もう少し漢方薬的な処方せんをつくっていかねばと考えています。

白川 私のところも、先ほど申し上げましたように、大型のガラス温室に設備投資しているような農家では、新卒なり、農業講習所といいますか、農業短大のようなところを出て就農する青年もあるわけですが、それ以外の一般の畑作や水稻ではほとんどありません。農業後継者としては、長男ではなく、次男が後を継いでいる場合もあります。そういう中で、先ほど言いましたように、今までの後継者というのは農家の1軒の家の後継者と考えていたわけですが、それでは行き着いてしまう。そこで、農地が荒廃してからじゃどうしようもないということで婦人農業を取り入れたわけです。

そのときはうちに農地がある奥さん方と考えたわけですが、次のターゲットには、豊田町に住んでいて農業をやりたいと思っているけれども、実際は土地がないという非農家の奥さん方を農業の後継者に考えたわけです。1戸の農家として考えるんじゃなくて、農地というのはその家についているものじゃなくてというふうな考え方を変えていかないと、後継者というのはもう無理なんじゃないかなと思います。

ただ、私たちのところは婦人農業でスター

トはしましたけれども、今になって、奥さんが1人で農業をやっていたんですが、だんなさんが手伝っているうちに、これなら勤めやめておれもやった方がいいということで、4、5戸の農家が、サラリーマンをやめて一緒にやり出しましたし、それから、私の直属の上司だった人ですが、その人も、自分で実践したいということで途中で農協をやめ、今、中国野菜をやっております。

やはり60定年制の後、農業をやりたいという方も若干出てきておりまして、そういった人たちが物すごく大きいハウスでない中国野菜ならやれるということで取り組んでいきますし、今まで小さい田舎の八百屋的なものをやっていた人が、だんなさんの死を契機に嫁さんと2人でやり出した事例もありますので、畑については農業の後継者は何とかあるかと思うんです。ただ、水田は、うちの方もさっき言ったように400町歩あるうちで、やはり転作が絡んでくる。農地の流動化を推進していても転作まで受けなきゃいけない、その作物がないから借りたくないという農家が出てきているのが現状ですので、この点が一番頭が痛い。

やはり嫁不足の問題はかなり深刻といえますか、目に見えてというのはないわけですが、農協の職員の中でももう30代、40代に入っている人でも独身もおりますし、お昼のときに雑談でも話していたんですが、昔は農協の女子職員なんていうのは格好の標的だったんですが、このごろ農協の職員になってくる女子職員は婿とりというか、そういった人たちが来ちゃう。もっとも、若い人たちのサークルのようなものを通して結構、結婚している人もいますが……。

今うちのところでも、生活課で結婚相談員をお願いして結婚相談をやっているんですが、現実には農家でそういう話がまとまることはまずないと言っていい。だから、この前も地区の指導課長会議で、このままの形で結婚相談

員会議を続けていくべきかどうかが討議されたわけですが、私としては、今のような結婚相談じゃなくて、できるだけ農協が男女交際のある場をつくってやるような手助けをしていくことがこれから必要じゃないかなと思っています。今も話に出ていたと思いますけれども、ただがむしやりに生産性を上げる、収益を上げるだけで農業にかじりついているだけでは、やはり嫁さんは来ない。十分につき合える人でないと無理じゃないかなと思っています。

私も結婚してもう大分なるんですが、うちの女房は浜松の町中から来ました。農業を全然知らないのが来たんですが、うちの場合もそうですが、奥さん方は時にはおもしろがってやりますので、やはり魅力を持たせれば、自分の小遣いになれば、やるんじゃないかなと思うんです。来ればやらなきゃいけないという、何かそんなのがあるとどうしても来ないと思いますので、そこら辺を踏まえて、農業青年にもっと上手にリードする力が欲しいんじゃないかな。今、何かというとすぐマニュアルになっちゃいますが、そんなのにマニュアルはないのですから、やはり農協の役目は、どういう形にしろ交際の場を幅広くつくってあげることじゃないかなと思っています。

新田 後継者問題は親の問題、特に母親の問題、さらに言うなら35歳から45歳の母親がどういう取り組みをしているか、ここが一番ポイントではないかと思います。

私が先ほど紹介したピオーネの事例を見ましても、やはり34、5歳から今40前後のお母さん方が真剣に取り組む姿を見て後継者が、ああ、やはり親たちがあんなにやっておるのという、いわゆる就職の意思決定がそういった時代にできたんですよ。お母さんが縫製工場に勤めて「百姓しろ」、これではだめだと思います。そんな時期にお母さん方が農業に向かわせるインパクトをどう周りからつくって

いくつか、行政がその道をどう開いていくかをやっぱり真剣に考えるべきではないか。それが即、後継者の問題ではないかと思います。そういった意味で、広島県は、農業後継者の育成資金制度を設けまして、建て売り農場制を過去20年やってきております。そういう環境をつくってやる行政の手だてが一つは必要である。

それからもう1点は、やはりこれからの若い連中にイベントをどう持たせていくか。特に村づくりにしてもですね。昨年、私の勤めておる三良坂町でブドウ祭りをやりましたら、若い人たちは一生懸命ですよ。ブドウをやっている人はもちろんですが、やっている人は5人しかいないんですから、とてもできることじゃないんです。しかし、家から通っておる若い人は夜1時、2時まで一生懸命なんですよ。そういったようなイベントを開けるように行政なり農協なりが支援してやるのが、具体的な一つの後継者育成の道ではないか。

それから、先ほどの話にもありましたが、はっきり言えば、ふらふら型の青年には嫁は来ないです。どこだってそうですよ、これは農村だけの問題じゃない。農村だけが何かひねくれたような感じで嫁不足だ、嫁不足だと、はっきり言えば、こんなことは私はどうも好かないんです。

**司会** 今4人の方々から、後継者の問題、それから嫁不足に対する問題について、それぞれ現状、対策、そしてそれについての考え方みたいなことを整理されてお話くださったんですが、この問題については、単に農業だけの問題でなくて、農村社会をこれからどう維持していくかということにかかわる問題でして、もっと広くいうと日本の社会をどう維持すべきかということにかかわる問題でして、それができなければ環境問題にもつながってくる非常に大きな問題なのかなと思っております。そういうことを含めて、もう少しフロアの方々からご意見、もしくはご質

問があればどうぞ。

○ 後継者問題について全く個人的な意見を申し上げたいんですけども、後継者問題ということで私は逆に騒ぎ過ぎじゃないかと思っています。と申しますのは、農業、特に日本の農業というのは今完全にゼロサムゲームになっていると思うんです。そんな中で、例えば新規に大学なり出て社会に出ますと、300万円ぐらいの収入になるわけですね。それを新たに吸収できるだけの経営体を持っている農家ならば、一部ありますよね、施設園芸農家だとか、畜産農家とか、そういうのは既にちゃんと後継されているわけですが、そうでない平均3ヘクタールとか何かの水田農家みたいなものが、その300万円の収入を確保する道があるかどうか。

例えば新たにそこで施設園芸を始めるとか何かになれば、後継者を置いてもいいかもしれないけれども、本体が300万円しかない収入のなかで吸収できるような形というのはあり得ない。逆に言えば、大学を出たぐらいの息子を持つ家庭というのは、親の代は平均的に言えば50歳ぐらいですよ、まだピンピンしているわけですよ。60歳のリタイヤしてさえ百姓をやろうかというぐらい、現在の日本人は元気なわけですから、そういうときに20歳の人を迎えることはあり得ないということ、を、まず前提に考えるべきだと思うんですよ。

確かに3ヘクタール、5ヘクタールというのは東北あたりの平均的な農家で、そういう農家が後継者がいないためつぶれたという例はあまり聞かないんですよ。それはおやじが65歳とか何かになって、息子が35か何かになって、何らかの形でつながれているというのが現実じゃないかと思うんですけども、私はそれ自身もよろしくないと思うんです。本来ならば3ヘクタール、5ヘクタールが、これが3戸に1戸ぐらいがつながって、その分を何らかの形で規模拡大に結び付けていく。

そういう形にならないと400万農家が生き延びることは今や絶対できないわけですから。その3分の1以下ぐらいになってもらわないといかぬ。本来的な農家として残るのはいいですけれどもね。

そういうことだから、余り後継者、後継者といって世の中が騒いで、外からしつらえるようなことはあるべきじゃなくて、それは経営体として自分たちが自分たちで考えて、ちゃんと継続がされるべきものはされていくというように私は思っているんです。農業の現場にいないものだから極端な言い方かもしれませんが、私は個人的にそう思っています。○ ちょっと教えていただきたいのですが、お嫁さんがなかなか来ないという問題の場合、それは専業農家だから来ないのか、あるいは専業農家であろうと、1種兼業農家であろうと、2種兼業農家であろうと、長男でおしゅうとめさん、おしゅうとさんと一緒に3世代同居とか、4世代ということは余りないかしれませんが、そういう生活形態にかかわる問題で来ないのか、その辺どんなふうに考えたらいいかということ、を、遊佐なり高畠の事例から教えていただきたい。

それから、生活クラブ生協と遊佐町の農協の場合、20年近く産直をやっていますね。生活クラブ生協も非常にしっかりした価値観に基づいた先駆的な生協活動を展開していると思うんです。生活クラブ生協の場合は、その背後の理念としては、都市と農村との連帯とか連携とか、お互い同士の生活の場を通して交流を深めながら、単なる経済主義に陥らないことを考えていらっしゃると思うんです。遊佐の方もそれに応えていかれるということで、その具体的な形として生活クラブ生協の方々が遊佐を訪ねて、いろんな催し物に参加したりとか、あるいは遊佐の農協の方も生活クラブ生協の方に出向いて営業活動も少しなされているというふうに聞いております。

そうはいっても、また農村の社会生活とい

うのは非常に伝統的な、今まで歴史的に形成されてきた土着的なものがあるだろうと思うんですね。そういう交流によって、割合クローズドな社会、閉鎖された社会の農村というのが具体的にどういうところで、生活の面や何かでも変わってきたところがあるんだろうか、あったとしたら……。実際には、やっぱり都市に住む生活者と農村に住む生活者の生活空間が非常に離れていますし、難しいところだろうと思うんです。その辺、何か教えていただけることがありましたら、お聞かせください。

佐藤 最初の嫁不足の原因ですけれども、専業とか兼業とかは余り関係なくて、一般的に嫁不足みたいです。専業だから特にということはないです。逆にいいますと、専業で大変やる気のあるところだと、嫁さんが来ているところもあります。逆に、兼業なんかでどっちつかずだと来ないところもあります。

ですから、本当に嫁がいけないというのは、やっぱり個人の問題が随分あるんだろうと思うんですね。親と一緒に住む、これだって別に構わないでちゃんとやっているところもありますし、農家じゃなくても、普通のサラリーマンでも親と別れて離れて暮らしているのもありますから、特に専業、兼業とか、あるいは親と一緒に住んでいるとかというのは、余り大した問題じゃないみたいです。

ただ、ちょっと話は外れるかもしれませんが、よく田舎の方で特に嫁不足というので、本人よりも周りがすごく騒ぐんですね。多分、個人の問題よりも、農村の社会といいますが、経済といいますが、その基盤は1軒1軒の農家なものですから、例えば共同の作業とかが随分、村ではあるんですよ、無償の労働力の提供の場なんですけれども。そういったことで農村が成り立っているものですから、1軒のうがちがふれるのは、農村にとって極めて重大な経済的な打撃になるんじゃないか。だから、本人よりも周りの方が一生

懸命心配してくれているんじゃないかな。

だから、多分うちの方では原因は、特にこれこれが原因だということはないと思います。やる気があればどこにでも、特に農業でも、農業は儲かるものだというのであれば、恐らく誰だってやると思いますよ。今のところ先が見えないものですから、なかなか手がない。それよりか勤めた方がいいやというような、あっさりした考えが随分多いんです。

生協との問題ですけれども、難しいですね。確かに20年ずっとつき合ってまいりまして、春の田植えの時期と夏ごろに生協の方が大挙してうちの方に来られまして、民泊されて農作業を手伝ったり、田んぼを見たりしていかれます。秋の生協のいきいき祭りには、農家とか農協とか僕ら役場も応援に行って、一緒に活動はしています。

確かに変わってきてはいると思うんですが、目に見えて急に変わったということはないんじゃないか。ただ、僕らも、都会を見る目はやっぱり徐々にではありますが変わってきているんじゃないかな。ほかを見る機会は余りないものですから、どういうふうに変ったかは、わからないのですが。

だだ、徐々に変わりつつあるし、生協の方でも、高校生とかの女の子がよく来るんですよ。実際、田植えなんかをしますと、すごく面白い、そういうものだとわかる結構、農業というものに理解を示してくれますし、そういう人と人とのつながりみたいなので今のところつながっているという感じはします。

答えにならないようで、済みません……。

○ 2点ほどお2人にお聞きしたい。まず新田さんに、農事組合法人のこととお聞きしたいんですが、最初から法人でやったことの意味と、あと実際、法人でやることのメリットについて……。

もう一つ聞きたいのは、私、昨年度ですか、地域営農農団の調査をしたんですが、

そのときにそういう法人をちょっと見たんですが、後継者が農事組合法人に入る一つの契機として、例えば、額は少なくとも定期的にお金がもらえる。そのうえさらに年金、社会保障、法人ですからそういうのができて充実できれば、もっと後継者が出てくるのじゃないか。そういう意味で、三次ピオーネ生産組合の社会保障はどうなっているか、お聞きしたいんです。

もう一つ、山形の星さんにお聞きしたいのは、上和田生産組合、この話をもう少し詳しく……。例えば地域農業との関係、つまり、地域農業の運動体と同時に例えば水田を守っていくとか、そういう地域営農とかかわりについてお聞かせ願えれば……。

新田 法人への動機ということだと思うんですが、これは先ほどちょっと触れましたように、未墾地をまとめて団地化しているという場合に、一番引かかる問題は用地の取得です。広島方式といって、広島では用地を取得する場合に、まとまった団地をつくっていく、少なくとも10ヘクタール以上に団地化していくことが一つの狙いとされています。用地取得については、例えば地権者が経営に参加しても、個人には売れませんよ、法人でないと売れませんよという条件を、広島県では開発方式としてつけているのです。

それから、大部分が既存の経営よりも新たな経営に取り組む場合が多いわけです。既存の経営の延長、例えば酪農をやるから土地を貸せというのかなりありますが、先ほど三次のピオーネを一つ紹介しましたように、世羅の幸水農園だって大体そうなんです。今までの経営の継続ではなく、新たな経営をやるよということになると、非常に不安が漂うわけですね。だから、1人ではどうにもならない。そこに考えを同じにした同志がある程度集まらぬと、物事は出発しないと思うんです。

それから、協業のメリットの問題ですが、はっきり言えば、初めから給料をもらってと

いう考え方で成功しない。果樹の場合でも、酪農を新たにやる場合でも、やはり5、6年は当たり前の給料はもらえんと思います。その間を耐え忍んでどうしていくか、だから、その辺で地元開拓の効果が出てくるんですよ。経営が大きいのになれば2町ぐらいありますから、三次の場合は2町というのはありませんが、世羅郡では1町を基盤に、軌道に乗るまでは畑をつくって漸次切りかえていくんです。一遍にばつと協業へ切りかえていくというのは大変危険がともないますのでね。

だから、私はいつも大きな輪を二つかくんですけれども、小さい輪から大きい輪へかにして移っていくかという過程が大事なんです。既存の地元開拓のメリットがそこにあらわれる。そういう意味で、はっきり言えば、初めから何んばと給料を期待するような者は、協業参加は残念ながらお見送りくださいということになるわけですよ。

それから幸いなことに、婿さんなりはUターンが多いんです。Uターンと言えば、少なくとも失業保険やその他がありますわな。それがかなり生活の支えになっておりますので、それが切れるころから、徐々にではあるけれども、収穫が出てくる。そこに一遍に切りかえることはできませんので、徐々に切りかえていって小さい輪から大きな輪へという考え方だと思います。

それから福利施設等については、厚生年金などをかけたりしていろいろやっておりますが、それは一応経営の目鼻がついてからですね。労災保険等には入りますけれどもね。そういう基本的考えで指導もしますし、できるだけそれに理解を持ってもらう。そこはねばり強く理解していただくということですね。

それともう一つ、協業のメリットは資金繰りですね。大型資金が借りれるという大きなメリットがありますよね、個人ではできない。例えば今ちょうどやっておりますが、近代化資金を1億円以上借りることになりますと、

農林水産大臣の承認が要るわけですけども、個人ではこれは借りられませんから、大きなメリットがありますね。大きなことはそんなところじゃないか。まだ細かいことはありますけれども……。

星 上和田生産組合のことについてお話しします。我々、20年ぐらい有機農業研究会でやってきたわけなんです、しかし、それは点の存在でしかなかったんです。空中散布が平野部の方から次第に山寄りの方に迫ってくるという時代を迎えて、あの段階で既に10数年、無農薬栽培をやっておって、比較的、上和田というところには会員が多くて、環境的には非常にようになっておったと思うんですが、空中散布によって一挙にそれは瓦解するという危機的な状況になったわけです。

しかし、これは研究会員の少数の力ではどうしようもないと考えまして、農協青年部なんかを中心として、広く地域の人々に呼びかけていく中で、これからの中山間地帯の農業の活路をどう開くか、その辺に視点を据えながら論議を進めていったわけです。農協の支所を巻き込んだ形で大体半年ぐらい議論をし、組織づくりにもまた半年ぐらいかかって、今から5年ぐらい前ですが、30戸ぐらい集まれば成功だと思ったんですが、実際参加したのが70戸ありました。次の年110戸にふえて、3年目に130戸になった。比較的順調に伸びてきたんですが、私ども10数年蓄えてきた技術的なノウハウを全部そこにぶち込んだんです。

人々はじつと我々の試行錯誤の実践を見て、なるほど、ああいうふうにやればやれるというような感触は持っておったんですね。やりたいたけれども、きっかけがつかめない農家がかかりあったと思うんで、そういう意味ではタイミングがよかったなと思ったわけです。

しかし、完全無農薬からの出発ですと非常に厳しいですから、除草剤1回は認める。しかし、堆肥は2トンぐらい入れて、あとは肥料は有機だけで農薬の地上散布は一切しない。

よそでは無農薬というふうに認められているレベルのものですが、そういう栽培基準を作ったんです。スタートからかなり高い目標を据えて踏み出さないと、中途半端なところで今の時代に通用しないということを絶えず力説し、絶対やれると自信を与えながら、地域運動として展開するための組織づくりを必死になってやったわけです。たまたま農協の稲作部会長とか、あるいは営農推進協議会の会長とか30代ぐらいの優秀な青年が数名おりまして、そういうのが農協を動かすような形でスタートしていったわけです。

20年も前ですと、3割、4割減収するような局面にぶつかったんですが、我々が蓄積した技術的なものを最初から施していきまして、大体1割とか1割5分の減収で初年度から十分な成果が上げられたわけなんです。

生態学的な手法で病虫害を防除することを基本にしていますから、例えば春先、枯れ草を焼くことによってカメムシの卵の密度をできるだけ少なくするとか、あるいは乳熟期にカメムシが田んぼに飛んでいって吸うわけなんですけれども、その乳熟期とカメムシの発生ピークが合わないように品種構成をしていってコシヒカリなんかは既にカメムシのピークが終わってから出穂するものですから、ほとんどカメムシの被害がない。今年の場合も、コシヒカリの場合は100%一等米だったのですが、その辺、十分な観察と生産管理というものをグループを設けながら絶えず入念に見回り、あるいは指導するという方法で実績を上げてきたわけです。堆肥の確保とか、あるいは非常に良質な有機質配合肥料の処方せんを書いて、小さなメーカーにつくり出してもらってみんな使うことで、品質の一定レベルを確保したことなどがありました。

私どもの地域というのは標高300メートル前後ですから、まだ基盤整備も行われていないところで、このまま自由化の時代にコスト競争の土俵に上げられれば完全につぶれる水田

地帯なんです。しかし、つぶれては困るという思いがあるから、地域の環境の自主管理みたいなものも含めて、もう一つの農業の道に活路を見出していけるんじゃないかという期待感が、3年間の間に130戸も結集した力になったと思うんです。

しかし、つくってはみても、それを受けとめてもらえる消費者グループとか、消費の側が整わないと、なかなか前進しませんから、私どもが今まで人間関係を取り結んだいろんな方のお力添えをいただいて、そこからご紹介していただいたり、決して消費者グループだけじゃなくて、良心的な業者とかスーパーとか、あるいは小規模な生協とか、地元の地場産業のレストランとか、非常に多彩な販売のネットワークをつくり上げて、大体20数団体ぐらい、4年ぐらいの間に関係ができています。釧路から南の方は神戸あたりまでですね。非常にいい品質の美味しいものができるものですから、大変歓迎されています。

しかし、除草剤1回といえども少農薬ですが、本当にレベルの高い消費者は完全無農薬でないと絶対だめという方々もおられるし、そういう方々の要望に応えて、意欲的な生産者が20名ぐらい、今、完全無農薬に挑戦して一定の量を確保するようになっています。それは徐々に広がっていくと思います。

それを引っ張っている機関車になっているのは、30代ぐらいの中堅クラスの青年団とか農協青年部で組織活動をやってきたリーダーたちです。130戸のうち大体80戸ぐらいが20代、30代の後継者を持っています。高齢化が進んでいると言われる農村の中では異色の存在なんじゃないかと思いますので、あそこの地域に限っては、あと30年ぐらいは大丈夫だろうと思っています。

ただ、空散の問題と、農協がここ2、3年進めているライスセンターのデボ方式というのがあるんですが、低温乾燥で自然乾燥に近いような風味のシステム化ですね。それを大

きな事業として推進している中で、有機農研とか有機米生産組合は、自然乾燥にこだわって、あるいは遠赤外線利用の小さな風力乾燥にこだわってライスセンターには全く参加しないわけです。空散とライスセンターの問題で農協と真正面からぶつかって、最近、農協は有機農業に対しては大変冷たいというか、決してそれを育成助長しようとする姿ではなくて、むしろ場合によっては封じ込めようとする姿勢に変わったという印象を持ちます。

これは単なる点の少数者の段階から、地域ぐるみの運動に発展して、一定の力をつけてくることによって、しかも基本姿勢が違うということになると、当然、避けては通れない闘いみたいなものであって、それで挫折するんじゃないくて、農協とも十分な話し合い、具体的な問題での接点を見出しながら、協同組合運動の基本精神は忘れないで、農協がだめだから勝手にやるというような短絡的な方法でなくて、もう少しじっくりと息長く取り組んでいきたいものだなと思っています。

多彩な核をつくり出してきているというのも一つの魅力でありまして、無農薬米で自然酒をつくったり、ワインをつくったり、ジュースとかジャムをつくったり、玄米でポンせんべいをつくったり、みそをつくったり、これは地場の小さなメーカーと提携してやるものですから、地域が活性化する一つの要因になってきていると思っています。

○ 星さんの地域も中山間地帯だろうし、かつ傾斜地で種なしブドウだとか、新しい品種のリンゴとか、そういったものにもチャレンジしていらっしゃるわけですね。そういった果樹園経営と、いわゆるローインプットの問題とのかかわりとか、それから、米はともかくとして、永年作物である果樹をつくる場合のインプットが、一体、環境とどう絡んでいるかということについて、実際に踏まえた所見をお話いただければ……。

星 私の方の地形的な条件から言うと、そ

んなに急傾斜のところにはブドウ園とか、リンゴ園は展開していないんです。平地とか、比較的緩やかなところ。ただ、隣の南陽市なんかになりますと、耕して天に至るみたいな、段々の果樹園がいっぱい開けているところもありますが、そういうところの環境保全のためには草生栽培とか、あるいは等高線の上に石垣を積んで、できるだけ土壌の流亡を防ぐというような工夫がなされていると思います。

最近、雨よけテント栽培といって、別に加温ではないんですが、サイドレス、テントだけ張るという、そういう方式によって飛躍的に品質の向上と、場合によっては半分か、3分の1ぐらいに少農薬にできるというメリットがあって、市場性を非常に高めている産地なんです。しかし、一方で資材費がかさむことと、果樹栽培の場合は労力が大変にかかることで、とりわけ我々のように有機農業にこだわっている場合だと、無袋じゃなくて、全部袋をかけることがあるし、それと水田の草取りの作業なんかともろにぶつかって、大変な労力のピークを迎えるときがあるんです。

これは、先ほど来議論されている労力不足の問題、後継者の問題とかかわって、有機農業といえども、その壁に今ぶつかっているんじゃないか。そこを突破できないと環境保全是できないし、国土の環境とか、地球環境とかいっても、現実的には足元の地域社会の中で、ちゃんと地域管理、自主管理ができなければ、トータルとして達成できないものだと思いますので、その辺のところに、もっと力を込めてかかわることができるのか。地域住民だけでどうしてもできないという場合には、草刈り十字軍のような感じで、都市の若い人とか、消費者の方々にも一定期間、頑張ってもらい、汗を流してもらいというような、そういう組織的な取り組みも、これからは求められてくるんじゃないかなと思います。

○ 星先生に2点ほど教えていただきたいんですが、村づくりの展開方向のところで、

共生塾の活動について。メンバーとか、開催の頻度とか、内容等について、それとかかわって、ゆうきの里桃源郷プラン——このプランは、この共生塾で作成されたものかどうか。

もう1点は、こういった展開方法と、行政とのかかわり、事業等のかかわりについて。これまでの歩み——お話の中では、あくまでも地場にあるものに協力してもらって、手づくりで変えていく形だったんですけども、今ある行政の事業の中で、事業を利用して突発的に展開していくようなことを考えられているのか。あるいは行政の事業は全く無視しているのか、その辺りをお願いします。

星 「たかはた共生塾」というのは、去年の4月に発足したのですが、元の助役の鈴木久蔵さんを塾長にして、全く個人参加で年会費1万円を納めて自前で学習するという機会をつくったわけです。今日、至るところで塾ばやりで、その時流に乗ったというわけではないんです。今まで同じような方向を目指しながら、それぞれのグループとか集団がばらばらに、個別的に活動しておって、その連携がもう一つ希薄であったという反省に立っていたわけなんです。その人間関係をもう一つ結合させていこうというような狙いもあったし、ただ単に、散発的なことだけじゃなくて、もう少し村づくり、町づくりというおおきな目的とか、あるいは、とりわけ非常に重要な環境問題をもっと深く学習していく中で、自分たちの地域をどう再生、発展させるのかというあたりに、視点を据えた学習を積み上げてみようというわけでした。

その趣旨に賛同していただいた方々は農家だけではなくて、サラリーマンの方とか、自営の方とか、町内はおろか県内各地、あるいは県外からも、消費者グループとか、あるいはジャーナリストなんかの方々は、東京とか、あるいは関西の方なんかも参加してくださったり、非常に多彩な顔ぶれになって、今、100人をちょっと超えているはずです。2カ月に

1回、中央の一流講師と言われる先生方をお招きして定期講座をやるんですが、その間に自由講座と称して、地域を訪れて下さった方々にその都度お願いして、臨機応変に多彩な講座を設ける、プログラムあるいは交流の機会を求めていく。外人の方々なんかも、場合によってはお願いするというような、そんなスタイルで、全く自由な発想で始めているんです。意外にこれは反響が大きくて、まだ1年たっていないんですけども、将来楽しみだなと思っています。

そういう中から、新たな村づくりの方向性が次第に見え始めてきたことなどがありまして、今度のゆうきの里、桃源郷プランという、仮のネーミングではありますけれども、ここにずっと挙げたのは、今ある素材を主体にしたわけなんです。しかし、例えばメーンになる、少し大規模な宿舎なんかを建てる場合には、億単位の事業費がかかると思いますので、それは農水省とか、自治省とか、環境庁とか、厚生省とか、各省庁でふるさと事業を展開、推進されようとしていますので、この地域の条件に見合ったものであれば、そういう事業も十分に勉強させていただいて、活用させていただく。

しかし、これは地元の町の行政というものが一枚加わって、全面的に支援体制をとるとか、一緒にやるというスタイルでないと、小グループとか、一定の地域の住民だけではなくなかなか難しい面もあると思いますので、最初から企画課あたりを通して話を進めていこうとしているんです。これはほんのたたき台の段階で、まだまとまったものではございません。これから鋭意話し合いとか、住民の合意を形成するための努力をしながら、あるいは都市とか、各関係省庁の方々などのご尽力をいただきながら、実現に向けて努力したいと思っています。

○ 施設型農業では、日本は非常に構造変革を進めた。これはだれも認めていることです

よね。そういう中で、この30年間、何の変化も起こさなかったのは米なんです。確かに3割の一律減反——地域別には若干の傾斜配分はしましたけれども——は事実なんです、米に関してはこういう構造変革を起こさずに、現在、一番難しい時期を迎えようとしている。

それで農業団体なんかには私はいつも言うんですが、自分たちで努力して、ある程度ここまでやった、そういう中で、この部分だけ何とかしてくれという話ならいいけれども、自分たちは何の変革もせず、例えば交換分合さえ推進しないで何が何でも反対だという状態で、ただ旗だけ振っている。それでは、とてももたないという感じがするわけです。

私は佐藤さんに質問したいのですが、ほかのものについては物すごく変革が進んできたのに、米については、この30年間を見たら、農家戸数はほとんど減っていないわけですよ。東北あたりで、今50歳とか、55歳とかで、平均耕作面積が3ヘクタールとか、5ヘクタールとか言われていますね。こういうおじさんたちがリタイアしたときに、果たして構造変革に結びつくような兆候があるのか。それとも、もう一度単純に世代交代されて、次の世代になれば完全な2種兼になる形で引き継がれるのか、一部はやめちゃって、露地野菜でおこなわれたように、集中産地化しちゃって規模拡大に結びつくのか。特に東北あたりの平場農村の生産構造というのは、日本の稲作生産構造の一番メーンであるし、かつ影響力が大きいですから、その辺はどうなりそうか、もしわかりましたら……。

佐藤 最初にもお話しましたが、もう多分5年すると、今の現役の方々がりタイアし始める時期だと思います。もう10年すれば完全にリタイアという時期だと思います。

問題は後継者なんですけれども、今の現役の人がたも、やっぱり同じような時期があって、親がりタイアしたときに、勤めていた人もいたらしいんですね。家を継ごうか、どう

しょうか、迷ったけれども、結局家を継いだというか、農業を継いだといった状況だったそうです、その当時も。今また同じような状況にきているわけですが、まず考えられるのは、一つは、全然継がなくてほっぽっちゃう。つまりだれかに売っちゃう、貸しちゃうというのが一つ考えられまして、もう一つは、兼業でやった場合、かなり機械投資をして労働力を、兼業でもできるような状況に持っていけるかどうかの問題が一つあると思うんです。これは、かなり機械設備が必要です。

よく機械に投資する部分が、日本では随分高いと言われていますけれども、あれは専業農家の投資じゃなくて、兼業農家の投資が多いんです。農業をするための投資ではなくて、兼業に勤めるための投資なんですね。

ですから、そういう投資をもっとふやしていけば、確かに勤めながらもできると思うんですけれども、米価がだんだん下がっていく状況の中では、これはかなり厳しいというか、とりづらいですね。ですから今一番心配しているのは、リタイアした途端に土地を手放しちゃうんじゃないか。そうした場合には、果たして受け手が何人いるのかが、実をいいますと、今一番心配しているところです。特に稲作は、土地集約的な農業ですから、確かに30ヘクタールとか、40ヘクタール規模まで1戸が持っていければ、スケールメリットも出てきますし、コストもかなり下がってくると思います。方向としてはそういった方向が本当はいいのかもしれませんが、だれがということになると、極めて厳しい——これは感覚です。

今のところ、確かに掘り起こしもやっていまして、やる気のあると思われる人がたを、もう恐らく5年ぐらいするとそういったことが始まるから、おたくでどうかと狙い撃ちをしています。今のところ、そのところは、うまい形でといいますか、引き継げるという自信は、正直申し上げまして、ございません。

○ 米価も過剰のもとで下がるし、経済性を見たり、生産費調査を見ても非常に劣悪化していて、たとえ10ヘクタールあっても、農業だけではやっていけるかどうかという状況になって、それがさらに悪化しそうな状況ですよ。それで、施設投資というのは、新たにやろうと思えば、2, 3千万の新たな機械なり必要だ。それぐらいの多額の投資を必要とするような状況になっているわけで、これを思い切ってそこまでやるという人は通常では出てこない。だから、継がないのは当たり前であって、だれが考えても厳しい状況にあると思うんです。

先ほどの議論にもありましたように、結局個人ではなかなか受け入れられない。地域でといった場合には、集落でというわけにもいかない。そういった場合に、法人の形態で有志が集まって、それを引き受けるという方向が考えられているし、実際にそういう例が出てきているわけですね。

広島の場合も、先ほどの事例では、新たな部門なり、新たな農地取得の事例としてあったわけですが、稲作に関しても、そういったものがだんだん出てきている。比較的大規模にやっていて、おやじさんが亡くなった。子供は兼業に出ているし、やるつもりがない。それをどう引き継ぐかという場合に、個別で引き受ける余力もない、あるいは自信もない。だけれども、今やっている50代、60代の人たち同士でも、一応やめた人は土地を出資してもらおうという格好で組合員になり、残った者が一応共同、法人の形態をとって、それを維持していく、そういう形で管理し、維持する。そういうのが、現実には庄原の一木なんかも、そういうふうになっておりますし、それから、その隣の町でもそういう方向が模索されているわけです。

これは広島だけではなくて、石川の松任なんかでも、正式な農事組合法人ではないにしても、任意法人として、結局個別では引き受

けられないけれども、3人なり4人なり、グループを組んでいた場合には、もしだれか事故があった場合でも、だれかがその作業を引き受けるなり何かで代替する形で継承する方向で、それが現実になりに議論されたり、農事法人化のためのノウハウだとか、知識が求められているわけなんです。

その点、星さんのところにもちょっと触れておられましたし、先ほど豊田町でも、家レベルで維持するのも無理だ、あるいは農業者で維持するのも無理となった場合、その次の段階でどう継承していくのかという点で、何か考えられたり、話題になっているのかどうか。そこら辺についてお聞きしたい。

白川 農業の後継、要するに農家じゃなくて、農業の後継として考えるとして、我々がやっていかなきゃいけないことは、住んでいる土地をどう荒さないでいくかということだと思います。1つのやり方として専業農家という形があるわけですが、うちの方だと無理だ。では、あと何がというので、うちの方では、水田の転作率は高いものですから、今のところ、収益のあるものがないこともあって、できれば一つなり、二つの集落で集落営農をやれないだろうかと考えております。

そこで、1カ所モデルをつくってやったのは、転作の連坦団地です。うちの方の特産、全国シェアで磐田地区が大体全国の85%から90%を持っているエビ芋（里芋の一種）をこの水田転作でやりました。それに手を挙げた農家は全部で30戸ぐらいあったのですが、全員でやるというと、いろいろ問題が出ますので、条件を投げかけた結果、希望者6名が集まりました。6名ではちょっと無理な規模だったんですが、その中のリーダーになった人が、いや、集まった人でやろう、これ以上広げて仲間割れを起こすよりもという形でやったわけです。今年で3年目になりますが、結構調子がよくて、10アール当たり120~30

万円の入収になる。水稻に比べるとかなりいいということで、モデルとしては成功したなと思っております。

あと、進めようとしているのは、農協がやれない人の土地を預かってやっていく形、それも市民農園的な5坪とか、10坪ぐらいの自給野菜のレベルを超えて、農協のスーパーで扱ってあげますからつくってみませんかという形。現金入収が少しでも入るようなメリットがあればやってくるんじゃないかと今考えております。

それから、星さんからも出ましたし、それ意外の方からも、系統へのちょっと冷たいんじゃないかとか、何もやっていないんじゃないかというご意見が出ています。これは別に弁明でもない、うちの農協がやっていることですけれども、確かに大きな全国段階の農協がどう動いているかは別として、うちの農協としては、先ほど申し上げた土地の集約化、水田対策を含めて、畦を取りましようよ、隣と協同してという形をやるんですが、都市化の中ですと、地価の問題で、ちょっとそれは行き詰まっている。しかし、水田の受委託をやる人間とすれば、小さい面積じゃ、とても効率が悪いものですから、大きい面積で言うんですが、やはり一反何十万という土地ですと、なかなか畦を取ってくれないというのが現状です。

水稻の有機栽培は、うちの方ではまだ水稻の指導員が研究へ入っている段階ですが、農協としても積極的にやっていきたいと思っています。今、うちの方の特産になっている白ネギにしろ、特に顕著なのは中国野菜ですが、無農薬とはいいませんけれども、ほとんど少農薬で、定植地に1回やるかやらないかで、あと防除をやっておりません。そのためにビニールハウスの雨よけでやる。ビニールも紫外線カットで虫が来ないのでやるという形をとっておりますし、年間10作とるということになりますと、化学肥料ではだめということ

で、年間20トンから30トンぐらいの堆肥を作付けのたびに入れて、肥料はほとんど99%有機配合を使っている。野菜づくりじゃなくて、土づくりをすれば、自然に野菜ができますよと農家に指導いたします。1年でとるのは化成肥料でとれるけれども、10年間コンスタントにとるためには、有機栽培だよと言っております。あえて私たちは、有機栽培ですよとか、無農薬ですよという形では売っておりませんが、売る方はそういう形で考えております。

この前も、消費者の人たちとの交流会で、安全性を一番言われましたので、うちの農協としては有機関係で持っていきたい。あえてそれを前面に出さなくても、そんなふうにやっておりますので、補足させていただきます。

新田 土地利用をこれからどうしていくのか、土地管理方式をどうしていくのかという非常に大事な時期にきている。先ほど豊田町さんも申しましたように、ステップとすれば、当面は集落営農をどう展開していくか。そして土地をどこへ持っていくかということではないか。

一つの方式として公社方式が、広島ではちょっと話題になっておるところです。公社とはどういうことかということ、町と農協が出資をして、年間雇用をそこで幾らかして、そして請け負い作業を中心に進めていくという、広島の現在の一つのやり方です。現実に広島に向原町というところで3年前にこれを発足させて、それが非常に注目をされています。

一方では、今、お話がありましたが、法人化の方向にいくところもある。私は、法人化は集落営農というか、そういうものを積み重ねた上でいかないと、いきなり法人を持っていって、三次のピオーネのように17、8キロから、同志が寄ってきて、その地域を管理するというのでは、稲作をつくった——土地を守ってきた感情論として、ちょっとそこは問題があるなというふうに思います。

集落営農といいましょうか、集落、みんな  
で集団をつくっていく。その上に、いわゆる  
集落の中で、できるだけ法人組織にしていく。  
これが先ほどご紹介がありましたが、広島の  
一木方式でございます。そういった形に進む  
のではないかと。

# 所 外 出 席 者 名 簿

駐村研究員

|               |         |            |
|---------------|---------|------------|
| 農林水産大臣官房      | 企画室     | 食料安全保障対策係長 |
|               | 調査課     | 調査専門官      |
| 経済局           | 国際企画課   | 海外連絡室長     |
| 統計情報部         | 経済統計課   | 課長補佐       |
|               |         | 資金物財統計係長   |
|               | 農林統計課   | 農村調査第1係    |
| 構造改善局         | 農政課     | 企画官        |
| 農蚕園芸局         | 有機農業対策室 | 企画調整係長     |
|               | 婦人・生活課  | 調査係        |
| 農業研究センター      | 経営管理部   | 比較経営研究室長   |
|               |         | 草地利用研究室    |
| (社)農村開発企画委員会  |         | 研究員        |
| (社)地域社会計画センター |         | 常務理事       |
|               |         | 研究員        |
| (社)全国農業構造改善協会 |         | 施設部次長      |
|               |         | 指導部参与      |
| (財)農政調査委員会    |         | 理事事務局長     |
|               |         | 研究員        |
| 農林中金総合研究所     |         | 基礎研究部首席研究員 |
|               |         | 副主任研究員     |
| 農村開発リサーチ      |         |            |
| 日本経済新聞        |         | 記者         |
| 日本農業新聞        |         | 企画開発部次長    |
| 農業共済新聞        |         | 記者         |

|    |   |   |
|----|---|---|
| 佐藤 | 源 | 市 |
| 星  | 寛 | 治 |
| 白  | 悦 | 男 |
| 新  | 義 | 見 |
| 並  | 久 | 男 |
| 大  | 茂 | 夫 |
| 遠  | 芳 | 英 |
| 白  | 俊 | 信 |
| 柏  | 秀 | 知 |
| 坂  | 本 | 則 |
| 黒  | 澤 | 正 |
| 伊  | 藤 | 浩 |
| 布  | 野 | 秀 |
| 斉  | 藤 | 薫 |
| 市  | 田 | 知 |
| 坪  | 井 | 伸 |
| 千  | 田 | 雅 |
| 柴  | 田 | 雅 |
| 藤  | 田 | 善 |
| 星  |   |   |
| 高  | 橋 | 威 |
| 田  | 中 | 勇 |
| 小  | 山 | 義 |
| 池  | 本 | 良 |
| 中  | 村 | 耕 |
| 磯  | 田 | 健 |
| 田  | 中 |   |
| 田  | 村 | 正 |
| 資  | 延 | 義 |
| 成  | 川 |   |